

# 生涯學習情報誌

Life Learning

# 10

2018  
Oct.  
NO.338



## 91歳の誕生日を迎え、心躍る事がら

生涯学習開発財団 理事長 松田妙子

ライフラーニングメンバーの皆様、日頃より当財団の活動をご後援いただき心より感謝申し上げます。

私、松田妙子は今月で91歳となりましたが、心身ともに健康で、毎日財団に出勤しております。

先週、NHK大河ドラマの撮影スタジオに呼んでいただきました。以前より本情報誌や財団ホームページで紹介しております来年の大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺〜」で、私の大叔父・大森兵蔵と安仁子（アニー・シェプリ）が登場するシーンの撮影現場です。



大森兵蔵と妻アニーの生涯を描いた著書『私は後悔しない』を手に。

スタジオに足を踏み入れた瞬間、映画で使用するような立派なセットの中、実際そこでしか感じるできない現場の緊張感が伝わってきました。大勢の人が関わって形あるものに創りあげていく現場、それを取り巻く空気感のすべてが心地よく感じました。

時空を越えて大森兵蔵と会えただけでなく、一瞬にして私が20代でアメリカ留学し、その後、初めて働いたテレビ局NBCの頃を思い出させてくれました。当時、アメリカ人に向けてのテレビ番組づくりを通して日本のことを考えた、私の原点でもあります。

この撮影現場で、ものを創り出す楽しさを再確認させられ、全身の細胞が喜んだようでした。91歳の誕生日を迎え、心躍る体験ができ、とても感謝しております。

撮影の合間にプロデューサーやディレクターの方々とともに、大森兵蔵を演じてくださる竹野内豊さんや安仁子役のシャロット・ケイト・フォックスさんとも談笑の機会があり、「活き活きして元気である生き方は最高ですね」と言ってくれました。

私の「心躍る」体験でしたが、財団も、L1メンバーズ交流会や博士号関連のイベントが、お互いに「心躍る」機会になるよう努めてまいります。そうした場で、皆様とお目にかかれますことを楽しみにしております。

# 鬼の学び

③

## 思考の幅

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

### 鬼塚忠のアンテナエッセイ

ふと考えた。「鬼の学び」などという大仰なタイトルを掲げさせてもらったが、そもそも学びとはいったい何なのか。

学びには主に「知ること」、「考えること」、「思考の幅を拡げること」の3つの面があるように思う。サッカー少年だった私はよく物事をスポーツになぞらえるのだが、知ることは筋力をつけること、考えることは技術を習得すること、思考の幅を拡げることとは柔軟性を高めるストレッチのようなものだ。この3つをバランスよく鍛えることで、学びは深まっていく。

ところが、日本人の口から発せられる「学び」という言葉は、多くの場合、「知ること」と「考えること」を意識したものであって、思考の幅を拡げるという面に考えが及んでいないように感じる。日本は教育制度からして、良質の官僚や社員を育成することを目的としている節があるので、必然的に知識を増やし、思考力をつける教育に主軸が置かれ、思考の幅を拡げることはないがしろにされるのだ。幅を拡げることが批判精神につながりかねないため、むしろ疎まれる傾向すらある。

学びについてこう考えた思いを持つようになったのは、大学生のときだった。テレビ朝日「朝まで生テレビ」で、誰だったか出演者のひとりが「日本人はもっと思考の幅を拡げるべきだ。そのためには日経、読売、朝日、毎日、赤旗、産経新聞の新聞各紙を読めばいい」と言っていた。

それぞれ経済、中道、リベラル、保守を代表する6紙である。なるほどと膝を打った私は、さっそくその言葉に做った。結果、たしかに思考の幅が拡がった。

それから暫くしてイギリスに語学留学をするのだが、何でも見てやろうという気持ちが強くなっていたので、前回は触れたように、その前後に世界40カ国を旅して回った。この旅こそ真の学びの場だったと、いま振り返って思う。私の思考の幅などまだまだ狭く、しよせん日本人の考える範囲内だと思知らされた。世界の人たちの考えは、さらにその外にあったのだ。

例えば、喜捨を得んがために自らの子の腕をへし折るインドの親を見たとき。日常会話を楽しみながら、壁も仕切りもない便所で躊躇なく排便できる中国の人々を見たとき。銃を持つことが法で正当化されている国家アメリカで本物の銃を見たとき。四六時中テロの危機にあるイスラエルで、ライフルを肩に下げ「国家を守る」と真剣な目で語るユダヤ人と対面したとき。サッカー観戦のためだけに生きていると言っても過言ではないイギリスのフリーガンと話したとき。銃で政権を倒すことに人生を賭けるパキスタンの反政府ゲリラと出会ったとき。ウオッカが体から抜けることのないロシア人の酔っ払いと語り合ったとき。隣国が戦時下であり、いつ戦火に巻き

込まれるかもしれない恐怖に怯えるマケドニア国民と話したとき。大麻を育てているタイ山岳地帯のカレン族の村を訪れたとき。

日本にいては決して知ることのなかった世界を目の当たりにして、自分がいかに小さな箱の中にいたのかわかるに至って、思考の幅を拡げるには海外のことを知らなければならぬと痛感し、以来、できるだけ海外のメディアを読むようにしている。最近では言葉の問題も、多くのメディアがネットで日本語版を発行しているので決している。以下に挙げるのは私が好んで読んでいる世界の5紙だが、すべて日本語で読める。

▼BBC (<https://www.bbc.com/japanese>)

イギリス公共放送の日本語サイト。イギリス国内に留まらず世界中で観られているテレビ番組だけあって、もっとも平等に世界を伝えている。ステレオタイプな視点はない。

▼朝鮮日報 (<http://www.chosunonline.com>)

韓国最大の発行部数を誇る『朝鮮日報』の日本語サイト。韓国の幅広いニュースを届けている。韓国の社会全体が日本を強く意識しているのが分かって面白い。

▼人民日报 (<http://j.people.com.cn>)

中国、というより、中国共産党のメディア。プロパガンダと言われる。確かにそうなのだが、プロパガンダとわかったうえで読めば特に害はない。むしろ日本のメディアのほうがよほどプロパガンダだと思うことさえある。



▼スプートニク (<https://jp.sputniknews.com>)

ロシアの通信社。Voice of Russiaを前身として2014年に設立された。東西冷戦は終わったが、日本は元々西側国家の一員。敵対していた東側の中心的存在だったロシアの思考は、今でもかなり興味深い。



▼ウォールストリートジャーナル (<https://jp.wsj.com>)

WSJはアメリカでも知識層が読む、かなり良心的なメディア。もちろん視点はアメリカ寄りだが、リベラルなのでアメリカファーストではない。



(WSJ以外は無料)  
それでは、ここで実際に読み比べてみよう。最近の日本関連トピックといえば、やはり全米オープンテニス2018での大坂なおみ選手の優勝だろう。

まずはBBC。一般的にテレビというのは、新聞に比べて深掘りしないメディアだ。しかしBBCは違う。しっかりと分析を加えている。まず、大坂なおみのストリート勝ちを報じ、セリーナ・ウィリアムズのスポーツマンシップに反する行為にさらりと触れ、大坂は日本人とハイチ人のハーフでアメリカ育ちであることを伝えている



る。次に、安倍首相のツイッターを画像で載せて、どう賛辞しているかを伝え、日本で最も発行部数の多い読売新聞の「コートでの強さと天真爛漫さのギャップが魅力」というコメントも紹介している。続けて早稲田大学の松岡宏高教授の言葉を引用し、国際結婚が増えた日本では、その子供がスポーツの世界で結果を出すようになったとして、陸上のケンブリッジ飛鳥、野球のダルビッシュ有、柔道のベイカー茉秋などにも言及している。

次に朝鮮日報だが、さすがはロマンチック映画映画大国、かつ世界一教育熱心な国だけのことはある。大坂の両親が日本でどのようにして知り合って結婚したか、どういった子育てをしてきたかに重点を置いて報じている。記事によると、「2人は大阪市内の英語学校で知り合って結婚、娘2人に恵まれ、次女のおおみが3歳の時に米国に移住した。『なおみ』という名前は国際的に活躍できるように黒人のスーパーモデル、ナオミ・キャンベルにやかつて付けたという。両親はリビングルームをテニス

コートのように飾り付けて子どもたちを遊ばせていたが、大坂が才能を見せるや思い切った米国移住を決心した。父親は米国で有名テニス選手たちの試合の雑誌やビデオを入手して自ら指導した」とのこと。  
人民日報もまたさすがと言うべきか、大坂なおみは「グランドスラムの女子シングルスで優勝を勝ち取ったアジアの選手としては中国の李娜選手に続いて2人目」だそう。あくまでも中国人が初、日本人は2番めだということだ。ほとんどの日本人は知らない情報だろう。

ロシアのスプートニクは「だが、注目を浴びたのは大坂選手の優勝ではなく、審判に暴言を浴びせたS・ウィリアムズ選手のヒステリーだった」と、まずは嫌いなアメリカをやりわりと批判。次に「大坂選手は、コートに入ったらS・ウィリアムズ選手のファンではなく、ただのテニス選手になるが、試合後にS・ウィリアムズ選手とハグした時には、同選手に憧れていた子供の頃の気持ちになったと語った」と、日本人である大坂には好意的ともとれる報じ方をしている。実は、東西冷戦の間、日本にはソ連(ロシア)の情報はほとんど入らなかったが、実はけっこう親日であることがスプートニクを読んでもれば分かる。アメリカよりよほど親日的だ。

最後にアメリカの代表、ウォールストリートジャーナルだが、経済紙だということもあり、特段の言及はなかった。第一、アメリカ人は我々が思っているほど日本人に興味を持ってはいない。日本など、アメリカにとっては数多ある諸外国のうちのひとつでしかないのだということが、こうした扱いの中からもうかがい知れる。

いかがだっただろうか。ある特定のトピックについて、世界ではどう報道されているかを知る面白さが伝わったなら嬉しく思う。

思考の幅を広げるストレッチとして、ぜひ皆様にもお勧めしたい。

### ●著者プロフィール

鬼塚忠(おにつか ただし) 1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金を底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思います、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。

著書:『風の色』(講談社)2018年映画化。『花戦さ』(角川書店)2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』(ポプラ社)2007年映画化。『カルテット!』(河出書房新社)2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』(河出書房新社)2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』(河出書房新社)、『僕たちのプレイボール』(幻冬舎)2012年映画化など多数。



# AJCクリエイティブコンテスト2018表彰式

## 財団後援事業

7月6日 上野精養軒にて  
主催・AJCクリエイティブコンテスト実行委員会

〈大賞〉内閣総理大臣賞



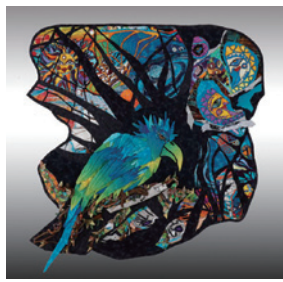
工藤嘉子氏  
アートジュエリー部門  
「陽月華鳥シリーズ  
～弓馬の祈り～」

〈金賞〉厚生労働大臣奨励賞



日名子八重子氏  
アートジュエリー部門  
「魔女のネックレス」

〈金賞〉文部科学大臣賞



鈴木慶子氏  
ファブリックアート部門  
「It's me」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



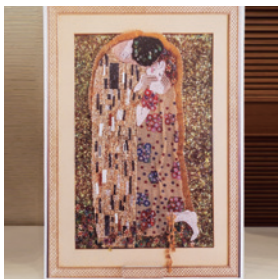
山田千代子氏  
アートジュエリー部門  
「芽吹き～  
Breath of buds～」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



Pieni Sieni氏  
アートジュエリー部門  
「衝動」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



nanaco\*氏  
フレームアート部門  
無題

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



のぐちあやの氏  
フレームアート部門  
「人魚」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



のほほんとし-made氏  
(授賞式欠席)  
クロスシェアアート部門  
「凜として、ゆらり。」

日本のクラフト作家たちの育成と奨励、社会的認知度と芸術度を高めることを目的とした「AJCクリエイティブコンテスト2018」。3月に東京都美術館で展示され、その表彰式とレセプションが、7月6日(金)、上野精養軒にて行われた。

財団が後援をしており、事務局長・佐藤梨奈が理事長代理として銀賞(生涯学習開発財団賞)を授与した。また佐藤は、コンテスト実行委員会の求めにより、レセプションの中で約10分間のスピーチを行い、大森兵蔵・安仁子から今に引き継がれている「Share your happiness」の精神と、生涯学習がこれからの日本にとってどれだけ大切かを訴えた。

文化学園大学元教授の高橋良子氏によるミニセミナー「作品コンセプトって何だろう?」も行われた。コンテスト実行委員会は、財団協賛会員のオールアウトライフワークスが事務局を運営しており、同社会長の江幡哲也氏が実行委員会会長を、社長の菱倉英一氏が事務局長を務める。菱倉氏の閉会挨拶では、来年度の開催方針が発表され、「手芸からアートへ」と、より質の高いコンテストを目指すこととなった。



↑大賞受賞の工藤嘉子氏を挟んで。  
→参加者を鼓舞する江幡哲也実行委員会会長。



→スピーチで生涯学習の意義を訴えた財団事務局長の佐藤梨奈。



→全国から参加した仲間と乾杯!



←菱倉英一実行委員会事務局長。